

博士学位論文審査要旨

2014年7月15日

論文題目： 現代シリアにおけるイスラーム伝統についての研究
— アフマド・クフターローを事例として —

学位申請者： 高尾 賢一郎

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 富田 健次

副査： 神学部 准教授 森山 央朗

副査： 神学部嘱託講師 仁子 寿晴

要 旨：

本論文が論じる「現代シリアにおけるイスラーム伝統」とは、オスマン朝の解体（1922年）からフランス委任統治（1920-46年）を経て、アサド政権（1971年-）の権威主義体制下に置かれた国民国家シリア・アラブ共和国において、19世紀以前からの諸要素を継承しつつ、様々な変容をこうむって形成されたイスラームのあり方である。

本論文は、その「イスラーム伝統」を、現代シリアを代表する宗教的権威・教育者であり、スーフィーでもあった、アフマド・クフターロー（1915-2004年）の経歴・思想・運動の分析から考察する。特に、スーフィーとしてのそれらに注目し、次の3点を指摘する。すなわち、(1) スーフィズムをイスラームの到達点とする霊性に関わる伝統思想を維持したこと。(2) 一方で、近現代のスーフィズム批判を意識して、スーフィズムに独特な言説を控え、クルアーン・ハディースに直接依拠するように努めたこと。(3) スーフィーとそれ以外のムスリムの区別を排し、党派を超えたムスリムの融和を説き、さらには、宗教間対話にも積極的であったことである。加えて、政治的には静観主義を採った。

本論文は、従来の研究では政治的側面からのみ論じられてきたクフターローについて、上記のような宗教的視点から見返し、スーフィズムの伝統と現代を両立させ、アサド政権が必要とする「公式イスラーム」をクフターローが提供してきた経歴・思想・運動を説き明かすことで、宗教的変容と政治的変遷のまじわりの中に立ち現れる「現代シリアのイスラーム伝統」を描き出したものとして評価される。

その一方で、本論文にはいくつかの問題点がある。技術的問題としては、例えば、伝統の継承に関して、ウラマー人名録を分析しているが、史料論的検討が十分ではなく、分析方法にも、さらなる工夫の余地があることである。本論の主旨に関わる問題としては、行論上の鍵概念である「イスラーム伝統」や「超党派」について、含意は理解されるものの、定義づけが曖昧で雰囲気議論を進めている箇所が散見されることである。こうした問題点に対しては、今後の研究を通しての再考・改善が求められる。

とはいえ、本論文は、先行研究の整理から独自の問題設定とその学問的意義を明らかにした上で、十分な資料的根拠と批判的分析に基づき、先行研究にない独創性を持つ議論をほぼ一貫して展開している。そして、現代シリアのイスラーム思想・運動と政治・社会の連関を立体的に描き出すだけに留まらず、近現代社会におけるイスラーム宗教権威のあり方や、スーフィズムとサラフィー主義の関係、またイスラームにおける正統を巡る論争など、大きくイスラーム研究全般に関わる重要問題の考察を深めるうえでも貢献しうる示唆に富んだ成果となっている。

以上の評価点と問題点を総合的に判断した結果として、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するに相応しいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2014年7月15日

論文題目： 現代シリアにおけるイスラーム伝統についての研究
— アフマド・クフターローを事例として —

学位申請者： 高尾 賢一郎

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 富田 健次

副査： 神学部 准教授 森山 央朗

副査： 神学部嘱託講師 仁子 寿晴

要 旨：

高尾 賢一郎氏は、2006年4月に同志社大学大学院神学研究科博士課程後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たすと共に、学位論文を提出した。

この提出論文に対して、2014年7月15日15時より、およそ2時間にわたって神学研究科委員会は総合試験を実施し、高尾氏から神学的素養ならびにイスラーム研究における十分な素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について、広く深い認識を有していることを確認した。

また申請者が、近代シリアのイスラーム研究に必要なアラビア語、英語、ならびにフランス語を習得していることは、アラビア語による人名録を文献資料としていることや現地シリアにおいて実施したアラビア語を介したインタビュー資料の活用、ならびに英語、フランス語の論考や著作をあまた引用していることから十分に明らかである。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

論文題目： 現代シリアにおけるイスラーム伝統についての研究
—アフマド・クフターローを事例として—

氏名： 高尾 賢一郎

要旨：

本論文の目的は、国民国家シリア，すなわち 20 世紀にオスマン朝の崩壊，第一次世界大戦，第二次世界大戦，独立後の政治的混乱，バース党政権の誕生を経て確立した現代シリアにおいて，近代以前の伝統を継承しつつ新たに形成されたイスラームの様態 —イスラーム伝統— の一端を，宗教的指導者が提示した思想・立場をとおして明らかにすることである。そのための方法として，本論文は，1964 年から逝去までバース党政権下のシリア・アラブ共和国で最高ムフティー（イスラーム法裁定官）を務め，現代シリアを代表する宗教的指導者としての地位を築いたアフマド・クフターロー（Aḥmad Kufṭārū, 1915-2004）を事例に取りあげる。本論文は，最高ムフティーという政治的性格が強いクフターローの立場に着目して，それによってしばしば等閑視されてきた，スーフィズムの指導者という別の側面をとおして，バース党政権誕生以前の彼の宗教的背景を分析する。それをとおして，クフターローの宗教的背景をバース党との関係以外の側面から多角的に考察し，もって近代以前のイスラーム的遺産を継承しつつ今日の政治・社会状況が加味されたイスラームの様態，すなわち本論文が取り組むイスラーム伝統のあり方を描く。

本論文の構成は，序論部となる第 1 章，課題の検証を行う第 2-4 章，結論部となる第 5 章の，計 5 章からなる。検証部について，まず第 2 章では，近現代シリアのイスラーム伝統の輪郭をウラマー（イスラーム学者）の人物像をとおして浮かび上がらせるため，18 世紀末から 21 世紀初頭に逝去した 1,373 人を取りあげるダマスカスのウラマー人名録を分析した。分析にあたって，まずは「イスラーム諸学を修めた者」というウラマーの一般的な理解に基づき，彼らの肩書きと学問背景を確認した。次に，ウラマーの系譜が形成される際の 1 つの紐帯としてのスーフィー教団に着目し，ウラマーのスーフィズムへの関わりを人名録から抽出した。その結果，特定のスーフィー教団に関与するウラマーは人名録中に多勢を占めるわけではないが，取りあげられるスーフィー教団のなかでクフターローの所属したハーリディー系ナクシュバンディー支教団が全時代を通じて一定の勢力であることが確認された。

また，その勢力の中心にはシャーフィイー派法学という学問背景とクルド人という民族背景を持つウラマーがいた。それら 2 つの要素は，ナクシュバンディー教団全体のなかで必ずしも多勢を占めるわけではない。しかしながら，シャーフィイー派法学についてはハーリディー系支教団のなかで勢力を広げていたこと，またクルド人についてはそのほとんどがハーリディー系支教団であり，さらにシャーフィイー派法学に所属していたことが確認できた。

まとめるならば，人名録をとおして見るウラマーの学問背景を，スーフィー教団に焦点を当てて見た場合，次のことが明らかになった。現代シリアが形成されてゆく過程で広く政治・社会に関与したウラマーの系譜の 1 つとしてスーフィー教団がある。そのなかではナクシュバンディー教団が一定の勢力を占め，さらに同教団のなかではハーリディー系支教団が過半数の勢力となり，その支教団においてシャーフィイー派法学が多勢を占める。またナクシュバンディー教団に所属するクルド人の多くが同支教団およびシャーフィイー派法学に所属する。これらは各集団内の割合としては常に多数派となるものではないが，何人かの代表的な人物をとおしてその系譜は維持されてきた。

それに該当する筆頭と言っている人物がアフマド・クフターローである。クフターローは，最

高ムフティーとしてバアス党政権、とくに 1971 年以來のハーフィズ・アサド政権と協働関係を築いてきた、現代シリアを代表するウラマーである。第 3 章では、彼の伝記をとおしてまずその宗教的背景を考察した。そしてクフターローの人物像に迫りながら、人名録から浮かび上がったハーリディー系ナクシュバンディー支教団の系譜の内実を確認し、彼がその系譜をどのように維持・展開したかを描き出した。

クフターローは、シャーフィイー派法学者であった祖父の代にダマスカスに移住したクルド人であり、父アミン・クフターローがハーリディー系ナクシュバンディー支教団の指導者イーサー・クルディーに師事したことが、クフターローと同支教団との関係の始まりである。クルディーの教育場は多様な学問的背景を持った人物の集まりであったと同時に、後にシリア社会で活躍するシャーフィイー派法学者でクルド人のウラマーを輩出する場所でもあった。クルディーの系譜をとおして、クフターローは第 2 章で述べたハーリディー系ナクシュバンディー支教団、シャーフィイー派法学、クルド人という伝統に連なる人物となる。

加えてクフターローは、20 世紀初頭のフランスによるシリア委任統治という状況下、反党派主義を掲げた父アミン・クフターローの存在をとおして独自の教育観を育んだ。クフターローは 1930 年代に父からスーフィー教団を継承し、教団の伝統と父の教育観の双方を継ぐスーフィズムの指導者として、アブー・ヌール・モスクでの教育活動に着手した。その後、彼はシリアの公的宗教界に進出し、アブー・ヌール・モスクに慈善活動を行う公益法人や神学校を併設するなどして、いわば自身とその教育場をより社会と関わる存在へと変えていく。これは、先行研究において中心的であった政治的御用学者という彼への視座をもたらす背景の 1 つである。

ただしこの変化は、クフターローをスーフィー教団継承以前の伝統から切り離すものではない。むしろそれ以降、彼はその伝統を下地としつつ、現代シリアの政治・社会状況に鑑みた効果的な宗教活動を展開していく。それを理解するための重要な鍵が、モスクを中心とした宗教センター、アブー・ヌールの存在である。クフターローは 1950 年代以降、アブー・ヌールをとおして慈善活動や宗教間対話に勤しみ、それによってバアス党政権のアラブ民族主義、また当時のハーフィズ・アサド政権が求めた「公式」イスラームの看板を支援・補強してきた。いわば、現代シリアにおいて宗教的背景と政治的背景を互助的な関係によって両立させたのである。

ここで重要となるのは、ハーフィズ・アサド政権以降、現代シリアで求められた「公式」イスラームとは何なのか、ということである。端的に述べれば、それは 1970 年代にムスリム同胞団との武装対立を経験したシリアにおいて、それに代わるより穏健で、政権との協働が可能な国家の公式なイスラーム言説となる思想・立場である。その点を踏まえ、第 4 章では、クフターローがスーフィズムを中心とした思想でもってバアス党が求めたその現代シリアのイスラーム思想を展開したことを分析した。

まず基本となるのは、イスラームの「霊的側面」にしてムスリムの「魂の浄化」となる、イスラームの基底としてスーフィズムを捉えたものであり、また「イフサーン」として、信仰と行為を兼ね備えた者が辿り着くイスラームの最高到達点と捉えたものである。「霊的側面」と「魂の浄化」の理解は、現代シリア、あるいは現代世界で宗教教育が軽視されていることを憂慮する彼の教育者としての立場を反映したもので、そこにおいてスーフィズムは、ムスリムあるいは宗教的人間に求められる霊性の涵養と位置づけられた。「イフサーン」の理解は、「イスラーム(帰依)」、「イマーン(信仰)」、「イフサーン(心尽くし)」というイスラームおよびスーフィズムにおける伝統的な 3 区分に基づいたもので、「霊的側面」と「魂の浄化」にクフターローの現代シリアの教育者としての背景が見出せるとすれば、「イフサーン」には伝統的なスーフィーとしての背景が見出せることになる。

加えて、教育者としての彼の経歴を反映したのものとして、スーフィズムの否定的側面を訴える理解も見られる。それは「タサウウフ」をはじめとするスーフィズム特有の用語が、スーフィズムの党派性を育み、それをもとにムスリムが分裂してしまうというものである。クフターローは

党派主義の除去という自身の教育方針に基づき、スーフィズム用語をクルアーンとスンナに見られる用語に置き換えることを説いた、それによって彼のスーフィズム理解は、必ずしもその特徴を顕著には示さない、ある種の潜在性を有することになる。本論文はこの思想の分析によって、クフターローのスーフィズム思想を捨象してきた先行研究を補足するものとなる。

そして専門用語の置換に代表されるこの潜在化したスーフィズムは、「クルアーン的スーフィズム」、すなわち「正統」イスラームのあり方として、彼が担う現代シリアのイスラームを形成する要素となった。それを理解する補助線となるのが、現代イスラーム思想における「正統」イスラーム言説の1つと位置づけられるサラフィー主義についてのクフターローの捉え方である。彼の提示するサラフィー主義は、超党派的サラフィー主義と言いうるもので、それはスーフィズムの潜在化、つまり超党派主義的なあり方とほぼ並行して語ることができるとともに、スーフィズムとサラフィー主義の並立、ひいてはスーフィズムの上位性を示しうる。このサラフィー主義理解は、彼と同様に現代シリアを代表するウラマーであったラマダーン・ブーティー (Ramādān al-Būṭī, 1929-2013) にも見られた。ブーティーはとくに政治的スローガンとしてのサラフィー主義を批判し、その思想には、バアス党政権あるいはハーフィズ・アサド政権との協働関係を築くに至ったウラマーとしての、政治的主張を排除した、穏健で超党派的な特徴が見出せる。

このように、クフターローのスーフィズム理解は、現代思想として「正統」イスラームたりえ、同時にバアス党政権下の現代シリアにおいて「公式」イスラームたるものとして展開される。とくに後者の点をとおして、その思想は事実上の一党独裁体制が敷かれた現代シリアの政治状況のみを考慮したものとも思われがちだが、クフターローは自身の政治的立場を、ナクシュバンディー教団の指導者としてのスーフィズム伝統、また父アミン・クフターローの後継者としての教育観を下地として確立し、それらの間に矛盾の無い関係を築くことに努めた。それに貢献したのがアブー・ヌール組織の展開と「クルアーン的スーフィズム」という思想展開であり、これがクフターローをとおして見る、現代シリアのイスラーム伝統の一端である。